



地域資源の調査・研究が進んでいます！



の数の推移から、森林や自然生態系農業による景観が果樹栽培に与える影響などを分析した内容を報告。「将来的に養蜂やハチミツ生産、エコパークとしての商品のブランド化などを視野に入れて調査を続けていきたい」と今後の展望を語りました。

そのほか、林業遺産登録に向けた調査や、自然生態系農業における有機質肥料の循環に関する研究、地域資源を活用した実践的英語教育についてそれぞれの担当者が進捗状況などを報告しました。また、南九州大学からは町内のブドウ畑とマンゴー農園で展開している

フィールドワークの現況が発表されました。

3月1日には、東京大学のフィールドスタディ型政策協働プログラムで本町の調査に取り組んだ山口空さん（農学部4年）と宮崎彩さん（大学院博士課程）が、合同で提案発表を

行いました。

テーマは「綾ユネスコエコパークで行われる学術研究を町に活かす」。海外事例や本町の現状などを分析したうえで、「大学に取り組んでほしい研究を町が具体的に提示する」、「エコパーク推進室を中心とする研究支援チームを作る」などを提言しました。調査に協力した町内の農業生産者やまちづくり協議会のメンバーも耳を傾けていました。

綾ユネスコエコパークセンター
☎77-13482
※毎週火曜日休館



2月18日から研修に取り組んだ宮崎大学地域資源創生学部2年の星野葵さん、田中健勝さん（左から）

column

ムカシトンボ

空飛ぶ生きた化石とも言われる日本固有のトンボ。2億年前から1億5千万年前までのジュラ紀に繁栄していたトンボの祖先の生き残りと考えられています。

写真のように春に羽化したばかりの時は羽を広げていますが、通常、草木にとまる時は羽を閉じているなど変わった特徴があります。

山中のきれいな渓流域に住み、幼虫から成虫になるまで5年以上かかるなど、トンボの中でも特に幼虫の期間が長いのも特徴的です。気候変動などにより山間部の生息環境が変わると真っ先に影響を受けてしまい、生息が途絶えれば、二度と帰らないデリケートな存在なのです。



綾町は、ユネスコエコパークとして地域資源などを調査・研究し、その情報や結果をまちづくりに活用するため、県内外の大学と調査・研究に取り組んでいます。

2月27日には、包括的連携協定を結んでいる宮崎大学・南九州大学による委託研究の年次報告会がエコパークセンター研修室で行われました。

宮崎大学農学部の光田靖教授は、平成28年から取り組んでいる調査について、日向夏ミカン畑に集まるニホンミツバチ